

ことばを学ぶ メカニズム

認知科学からのアプローチ

今井むつみ
Imai Mutsumi

第8回

evidence と evidences

——辞書だけではわからない英語の理屈

先月は“furniture”をはじめとした、日本人の感覚からすると可算名詞に思われる上位カテゴリーが不可算名詞なのはなぜかということ考察した。先月号に引き続き、日本人の感覚では可算・不可算の判断が難しい例について考えていき、コーパスを使って母語話者の感覚に迫る方法を提案したい。現在筆者はコーパスを使って意味を理解するプロジェクトを早稲田大学国際教養学部のヴィクトリア・ミュラーライゼン准教授と共同で行っており、今回のコーパス調査もミュラーライゼン准教授にご指導いただいたことを明記しておきたい。

辞書の限界

連載の以前の回で“evidence”は不可算名詞であるとして書いたが編集部からある辞書には可算の使い方もある、と指摘され、びっくりした。evidence は科学ではもっとも頻繁に使われる語の1つで、論文には必ず何度も出て来るが、可算の用法は一度も見たことがない。そこで自分でいくつかの英和辞典で調べてみた。ある英和辞典では、そもそもこの語が可算か不可算かが表記されていない。語釈の1は「(…の) 証拠, 根拠, (…という) 証明, 事実」。語釈2は「(…を) 明白に示すもの; (…の) 印, 徴候, 形跡」とある。語釈1の用例を見てみると“a strong piece of evidence”と“a hard evidence”の2つが挙げられている。つまり、最初の用例は不可算、2番目の用例は可算用法のように思われる。

別の英和辞典では最初の語義で[U, C]とあり、語釈として「証拠, 根拠」さらに「数えると

きは a piece [two pieces] of evidence; [C] は〈まれ〉」とある。

この2つの辞書の記述では evidence が可算なのか、不可算なのか、あるいはどういう時に不可算でどういう時に可算になるのかがよくわからない。最初に[U, C]とあるのに「[C]の扱いはまれ」と書いてあるが、まれに可算として使われるのはどういうときか、それを知りたい。

『オックスフォード新英英辞典』では最初の語義のエントリーにはっきりと[mass noun]とあり、“the available body of facts or information indicating whether a belief or proposition is true or valid”という語義が与えられている。しかし続いて可算とも不可算とも書かれていない“signs or indications of something”という語義が与えられ、例文として“These evidences indicated that houseflies could be used as a model system…”とある。これは明らかに可算名詞の用法だし、日本語で、「これら(3点)の証拠は…」という感覚とじっくり一致する。つまり、学習者の立場からすると結局、evidence は可算でも、不可算でもよい、という結論に落ち着いてしまいそうだ。しかしほんとうにそうだろうか？

evidence と evidences の用法をコーパスで調べる

英和辞典でも英英辞典でも普通サイズの辞書では、現代の母語話者の間で用例がどれほど一般的なのかがよくわからない。そういうとき、コーパスで調べることをお勧めしたい。

OED (Oxford English Dictionary) の完全版で

は、膨大な数の用例が含まれていて、その用例の年代も明記されている。電子版では、OEDの用例をコーパスのように使うことができる。まず、“evidence”と“evidences”をターゲットに検索し、それを年代順にソートする。すると以下のことが分かった。

- OEDには evidences の用例は408件あり、対して evidence は4,960件の用例が含まれている
- 408件の evidences の例のうち、ほとんどのものは古い年代のもので、法律か宗教の関係の文脈で使われている。
- 1900年より新しい例は48件しかない。
- 2000年より新しい用例は2件しか見つからない。しかもその2件の文を書いた人は英語非母語話者かもしれない。というのは著者名はそれぞれフランス人、スペイン人と見受けられる名前で、テキストもフランスとスペインで出版されたものようだからである。
- 他方、evidence の方は1900年以降の用例が2,116件、そのうち2000年以降のものが414件ある。用例の多くは科学の論文などから採取されたものだが、新聞、『タイム』や『ニューズウィーク』などをはじめとした一般誌から取られたものも多い。

さらに Corpus of Historical American English (COHA) というコーパスでも調べてみた。COHA コーパスには1810年から2009年までのテキストが集められている。コーパスについている検索プログラムを使うと語の様々な形での検索が可能で、ここでも名詞としての“evidence”と“evidences”をそれぞれ分けてサーチすることができる。(evidence は動詞でも使われるが、COHAでは964カウントと頻度はそれほど多くない。)

- evidence の出現頻度は COHA コーパス全体を通じて41,719件であった。
- 41,719件の用例を全部見ることは非常に大変だが、プログラムには指定した数(例えば100とか500とか)の用例をランダムにコー

パスから取ってきて、文と文脈を提示する機能がある。これを使って100例をランダムサンプリングしてみると、その中に、evidence が可算名詞で使われた用例はわずか1件しかなかった。以下の用例である。この用例も1883年のものだった。

- It is an evidence of how permanent and unchanging things are here that the house where Carlyle was born, eighty-seven years ago, and which his father built, stands just as it did then . . . [Magazine, 1883]

年代ごとに evidence の可算用法を10年ごとに区切り、100万語に対して何回出現するのかを調べてみた。すると1810年代に66.88回、1820年代には122.85回、最近では1980年代が116.53回、1990年代が119.36回、2000年代が97.10回だった。

したがって、古い時代でも evidence を可算的には使うのはごく限定的であったことがわかる。コーパスで調べてみると、辞書ではわからなかったことがいろいろと見えてくる。もちろんすべての単語をコーパスで調べることは時間的に無理だろう。しかし、辞書では母語話者の感覚がわからないことがあるということ意識し、コーパスを使って深く意味を探る活動を含めることは、国語教育、英語教育を問わずことばへの感性を高めるためにとても有効である。関連する単語を(たとえば evidence を調べるときに information, knowledge など、ほかの不可算の抽象名詞)複数調べてそれらを比べると、共通するパターンも見えてくる。パターンを学習者が自分で見つけることができれば、英語母語話者の感覚が皮膚感覚として理解できるようになり、英語を勉強することへのモチベーションを高めることも期待される。

(慶應義塾大学教授)

参考文献

Oxford English Dictionary:
<http://corpus.byu.edu/oed/>
Corpus of Historical American English:
<http://corpus.byu.edu/coha/>